

Journal of the International College  
for Postgraduate Buddhist Studies  
Vol. XVII, 2013

国際仏教学大学院大学研究紀要  
第17号（平成25年）

智顛撰 『維摩經文疏』 訳注（一）

藤  
井  
教  
公

# 智顓撰『維摩經文疏』訳注（一）

藤井教公

## はじめに

本稿は、智顓（五三八―五九七）撰の維摩經疏の一つである『維摩經文疏』の訳注である。同疏は後述するように、智顓の最晩年の撰述として、智顓教学を窺う際には重要な資料とされてきたのであるが、その内容が『維摩經』の一々文々の随文解釈であり、その分量が多いこと、また天台六祖湛然（七一―七八二）がその冊略本である『維摩經略疏』を製してより、そちらの方が重視されて、『維摩經文疏』は顧みられることは少なかったとされている。

しかし、近年、平井俊榮氏による吉藏疏との関連からの研究や、山口弘江氏による『維摩經文疏』を含む維摩經疏の成立、文献学的分析、思想内容など全体的研究がなされるようになった。<sup>①</sup>また、同疏の内容に関する教学上の問題についても注目されるようになってきた。<sup>②</sup>筆者もかねがね『維摩經文疏』の重要性は認識しながらも、その利用は部分的な利用に止まっていた。それが、平成二十三年度より、本学の筆者の担当する授業で同疏の講読を開始し、それが現在に続いているので、ある程度の分量がまとまったら訳注を刊行したいと考えていた。今

回紀要執筆の機を与えられたのを幸に、本稿を掲載することにした。原稿は、本来受講者の作成したものを教場で訂正し、筆者が最終的責任を負ったものを掲載すべきであったが、諸般の事情で、今回は筆者一人が作成した稿を用いた。

本稿は依用テキストの段数五段に満たない分量であるが、以後、掲載の機会があるたびに引き続いて刊行して行きたい。当初は現代語訳を付す予定であったが、訳文の推敲にかなりな時間を要するため、時間的制約もあって割愛せざるをえなかった。

また原稿は十分に推敲されたものでなくて多くの錯誤や遺漏があると思われるが、本疏は『大正藏經』に入蔵しておらず、その存在も一般には余り知られていない点、またこれまでに国訳がなされていない点を鑑みると、試金石としての幾分の意義があるうと考え、あえて印行に付す次第である。

## 一、『維摩經文疏』について

『維摩經文疏』は天台智顛の最晩年の著作で、晋王廣(後の隋の煬帝)の懇請によつて述作され、献上されたものである。佐藤哲英氏の研究によれば、<sup>3)</sup>智顛は開皇十五年(五九五)、六月二十五日から同年七月二十七日までの間に、第一回目の献上本として『玄義』十卷を献上したという。その十巻の内容は『三觀義』二巻、『四教義』六巻と『四悉檀義』二巻であろうとする。『三觀義』は今日二巻として、『四教義』は十二巻として現存するが、『四悉檀義』は今は散逸して伝わらない。第二回目の献上本として、佐藤氏は『国清百録』所収の晋王廣や秘書監柳顧言等の書簡、智顛の遺書などの資料から、開皇十七年三月から四月頃に、『玄疏』六巻と『文疏』八巻の献上があったとする。従来はこの献上は考慮されず、献上は二回と数えられていたが、佐藤氏は現存資料の記述

と二回献上説との矛盾を解決する説として三回献上説を提唱したのであった。この第二回目の献上本は智顛自身にとつては意に満たないものであったのか、晋王廣への遺書にその焼却を請い、晋王廣はその遺志に従つて焼却したのでその内容は明らかでないとするが、『文疏』八巻は経の隨文解釈で、第一回目にはなかつたものである。智顛がこの後著した『文疏』は二十五巻であるから、作成途中のものであったとされる。智顛は第二回目の献上の後も続いて維摩疏の作成に尽力したが、ついに病に倒れて、開皇十七年十一月二十四日、晋王廣の使者と共に天台山から下山して王への献上の旅の途中、石城で示寂した。その後、翌年正月に弟子の灌頂と普明とが智顛に代わつて第三回目の献上を行った。この時の内容は、『玄疏』六巻、『文疏』二十五巻の、計三十一巻であつた。

この『玄疏』六巻は、現存する智顛撰の『維摩經玄疏』六巻に相当し、『文疏』二十五巻の内容は経の仏道品までの隨文解釈で、経の最後まで完結していなかつた。後に灌頂が最後の囑累品までを補完し、二十八巻とした。これが今日残る『維摩經文疏』二十八巻である。佐藤氏はこの『文疏』は『玄疏』とともに智顛最晩年の述作で、『文疏』にしても口授本ではありながら、二十五巻までは智顛自身が目を通してしているので、天台三大部よりも智顛最晩年の教學思想を窺う上で重要な資料であるとされる。

しかし、このような意見に対して平井俊栄氏は、吉藏と智顛の両者の著作中に見られるパラレルな記述について詳細に検討し、現存の『維摩經文疏』中の記述にも吉藏著作からの援用があり、それは灌頂の補完部分以外の部分、すなわち、智顛が一度は自ら目を通してある部分に及んでいることを明らかにした<sup>1)</sup>。氏は、佐藤氏の三回献上説に対して、晋王廣に対して智顛が出来な維摩疏を献上することは考えにくい、資料的矛盾は資料そのものの信憑性を疑うべきであるとし、『国清百録』中の資料の捏造の問題を提起している。そして、佐藤氏が智顛の最晩年の教學思想を窺う際に重要な資料として『維摩經玄疏』と『維摩經文疏』を挙げるのに対し、『維摩經文疏』については、灌頂の手が入っているので智顛親撰という大前提が崩れたとし、その重要性に対して疑義を

出している。しかし、すでに安藤俊雄氏も指摘しているように、吉蔵著作から智顛著作へという灌頂による援用関係だけでなく、智顛から吉蔵へという引用関係も認められるので、<sup>⑤</sup>一方からのみ見るべきではないと考える。同疏の内容は羅什訳『維摩經』の文々解釈であるが、その解釈方法について、先の佐藤哲英氏は「智顛の随文解釈は法華文句に因縁、約教、本迹、觀心の四積があることで有名であり、一々の經文を四積にかけて解釈している。然るに維摩經文疏ではこの四積のうち本迹積を欠き、因縁、約教、觀心の三積だけとなっている。」と述べ、また『維摩經文疏』には解釈法としての四種積のうち、本迹積を欠いている<sup>⑥</sup>としている。また、菅野博士氏も、本迹積を除いた三積について、約教積、觀心積の二つは疏中にその名称が見えるとするが、しかし、因縁積については、『維摩經文疏』には「法華文句」の「因縁積」という名称も出ないし、因縁積の内容である四悉檀による解釈も見られない、としている。<sup>⑦</sup>

しかし、本迹積について言えば、実際に『維摩經文疏』における「垂迹」の用例を調べてみると、全巻中に十九回の使用例が見られるのである。これは直接の名称は見られなくとも本迹積と同様の解釈法が用いられているということに他ならない。また、四悉檀の使用例について見ても、『維摩經文疏』中に、仏国品の章名を解釈する部分で、「総明仏国」「別明仏国」乃至「説教」「觀心」「用仏国義通釈此經」に至るまでの八重の項目を設けて解釈しているが、その最初の「総明仏国」の末尾で、このようにある。

若しは淨、若しは穢、皆不可説なり。因縁有るが故に而て可説なれば、悉檀、機（に赴くに）、四句、皆、説くことを得るなり。（『新纂大日本統藏經』卷十八、466c）

ここでは四悉檀は衆生の機に赴くものとしていて、その意とするところは、教が四悉檀によつて可説となるということである。このように四悉檀が説かれているが、そもそも四種積の因縁積とは衆生と仏の因縁を四悉檀で解釈するものであるから、因縁積という言葉はなくとも、四悉檀に拠る解釈は実質的に因縁積による解釈にほかな

らない。同じく仏国品の釈で、「能師子吼名聞十方」の經文の釈中に次のようにある。

能く四不可説において四悉檀を用いて縁に赴いて説き、能く天魔を伏し、諸の外道を制して、決定して衆生界内外の見思の惑を破し、衆生涅槃仏性、恒沙の法宝の法に存するなり。(同卷、p. 87c)

ここも四不可説を四悉檀を用いることによって衆生の機に応じて説くことができるという、仏の説法の興起は四悉檀によるとする釈である。また、疏中には四悉檀のそれぞれの悉檀、各各為人悉檀、対治悉檀、世界悉檀、第一義悉檀が説かれており、因縁釈が疏中に見られないということではない。

次に、經の分科について見れば、『維摩經文疏』は序・正・流通の三分科である。その内容は次に示すように、今、此の經文を開いて三分と爲すとは、一に如是我聞より始め、寶積、七言の偈を説くに訖るまで、文、通別兩序を具す。此れ正説において由藉の義足を名づけて序分と爲すなり。

二に寶積佛國の因果を請問するより已去、見阿闍佛品に訖るまで十一品半の經文有り。皆、不思議解脱佛國の因果を明かす。皆是れ機に赴くの教にして、現在益を沾す。並びに正説と爲すなり。

三に法供養品より囑累品までとなつて、天帝の發誓弘經、如來の印可、勸發囑累は宣しく未來に通じ、流傳して絶えざらしむるを明かす。此れ並びに流通に屬すなり。(同卷、p. 87c)

とあり、序分は「如是我聞」から寶積が七言の偈を説くまで、正説分は寶積の請問から見阿闍佛品まで、流通分は法供養品より囑累品までとなつている。この説は智顛が従来の諸師の種々の説を批判して自説を述べたものであったが、三論の吉蔵が自説を幾度か改め、結果的に智顛の分科と同じものになっていることについて、菅野博士は智顛から吉蔵への影響の可能性があつたことを仄めかしている。<sup>8)</sup>

以上、『維摩經文疏』の梗概について触れた。以下、第一卷の科文を掲げておく。

### 『維摩經文疏』科文

I 經の度ること尽くならざるを明かす。(464a12-b13)

II 略して文を分かつ。(464b13-465b8)

1 先に古今の諸法師、經を開くこと異なるを出すことを明かす

2 一家の判釈を明かす。

III 仏国義を弁す。(465b10-470c15)

1 総じて仏国を明かす。

2 別して仏国を明かす。

3 仏国の因を修するを明かす。

4 仏国を見ること異なるを明かす。

5 往生を明かす。

6 説教を明かす。

7 觀心に約す。

8 仏国義を用て此の經を通釈す。

IV 品を釈す。(470a9-c17) (以上巻第一)

V 正しく經文に入る。(470c22-) (以下、巻第二)

## 二、使用テキストについて

本稿ではテキストとして、『新纂大日本統藏經』第十八卷所収の經典ナンバー三三八の『維摩經文疏』を使用

する。新纂の『統藏経』は、目録二巻を含む全九十巻で、一九七五年から八〇年にかけて国書刊行会から河村孝照氏を編集主任として編纂された。『大日本續藏経』と『日本校訂大藏経』の中国撰述部部分と新たに入藏した典籍につき、版式を『大正新脩大藏経』に倣って一頁三段組みに改めている。旧版は上下二段で一段十八行であったが、それを一段二十四行、一行十九字詰めとしている。従来の旧版は、数冊ごとの舛入りになっていて取り扱いに面倒で、表示も第〇輯第〇套第〇冊第〇頁表・裏、上・下というように煩瑣を極めた。それが新たにスタイルを『大正藏経』と同様の形式にして、扱いに表記に便ならしめた点は大いなる利点である。現在、台湾の中華電子佛典協会(CBETA)で電子テキスト化されており、ウェブ上にアップされている。世界的にも『大正藏経』の電子テキストと同じような利用のされ方をされつつある。しかし、一つ残念なことは、フォントが「ISフォント」でなく、BIG5フォントが使用されていることであるが、これは大きな問題ではない。

本稿で利用する『新纂大日本統藏経』のテキストは、宝暦十三年(一七六三)正月の日付のある准三宮公遵親王謹製の「廣本浄名経疏序」と、同じく宝暦辛巳(一七六一)秋八月、比叡山北谷前住龍珠守篤による「新刻維摩経文疏序」が付されたものである。後者の「序」によると、宝暦庚辰(一七六〇)に、匿名の沙門らが資財を寄進して新たに刻することができたという。その凡例注記によれば、もともと巻二十五までは経文との会本になつており、経文と釈文との区別を付けやすくするため、釈文を一字下げたという。また、灌頂の補完部分、卷二十六以降の三巻は、会本形式となつていなかったが、これを会本形式としたという。そして、全巻に亘つて湛然の『維摩経略疏』と対照し、欄外に字句の異同を記したという。しかしこれは完全ではないようで、今回掲載部分についても遺漏の箇所があった。以下に凡例を挙げる。



註

- (1) 山口弘江「博士論文要旨」天台維摩經疏の研究」(駒澤大学大学院仏教学研究会年報』第三十九号所収、二〇〇六年五月)、同「天台維摩經疏に関する一考察」(駒澤大学佛教学部論集』第三十六号所収、二〇〇五年一〇月)、同「維摩經文疏」所引の『維摩詰所説経』(『印度学仏教学研究』第五十四号第一号所収、二〇〇五年一二月)、同「維摩經文疏」と『維摩經略疏』の比較研究 (一)」(『駒沢大学大学院仏教学研究会年報』第三十七号所収、二〇〇四年五月) などの一連の研究。
  - (2) たとえば、『維摩經文疏』で説かれる通相三觀については、宮部亮侑「天台智顛の維摩經理解―通相三觀をめぐって―」(『天台学報』第四十八号所収、二〇〇六年一月)、井上智裕「維摩經文疏」における佛土説について」(『天台学報』第四十九号所収、二〇〇七年一月) などの成果がある。
  - (3) 佐藤哲英『天台大師の研究』(p.p. 416-426) 第四篇「經疏類の研究」の第二章「維摩經疏」(百華苑、一九六一年)。以下の記述は右の佐藤氏の成果に拠る。
  - (4) 平井俊栄『法華文句の成立に関する研究』第二篇序論「智顛と吉藏」第二章「維摩經註疏をめぐる諸問題」p.p. 45-99(春秋社、一九八五年)。以下の平井俊栄氏の見解は右の書に依る。
  - (5) 安藤俊雄『天台学―根本思想とその展開―』附篇「如來性惡思想の創設者」三「天台維摩疏と嘉祥吉藏」、四「歴史的根拠」p.p. 399-408(平楽寺書店、一九六八年)。
  - (6) 佐藤哲英『天台大師の研究』p. 405。
  - (7) 菅野博史『法華文句』における四種釈について」(『印度学仏教学研究』第五十四卷第一号、二〇〇五年二月)。
  - (8) 菅野博史「維摩經分科に関する智顛と吉藏の比較」(『印度学仏教学研究』第三十三卷第一号、一九八七年十二月)。
- また、經の分科については智顛と吉藏両説の關係について、灌頂を媒介として吉藏から智顛へという逆方向の關係を示

唆する研究がある（平井俊栄前掲書、p.p. 56-63）。

(9) この守篤の「序」に関しては、すでに山口弘江氏の「江戸時代の天台維摩疏の研究動向について」（『宗教研究』第七六巻第四輯、通巻三三五号、p.p. 409-410、二〇〇三年三月）に内容紹介がなされている。

## 凡例

- 一、テキスト原文には一、二点、レ点などの返り点が施されているが、読点や句点はない。今、返り点を省き、意味に従って句点を施した。
- 一、テキストの文中には頁と段の変わり目にカッコで『新纂大日本統藏経』巻十八の頁と段を示した。
- 一、字体はテキスト部分と書き下し部分は、原則として正字を用いた。それ以外は略字を用いた。
- 一、テキスト文中のゴチック字体部分は『維摩経』の経文部分である。

【テキスト】『新纂大日本統藏経』巻十八、464a7-24（以下頁、段、行のみを記す）

維摩羅詰經文疏卷第一

釋佛國品初

[464a10] 次明入此經文。大爲五意。第一明經度不盡。第二略分文。第三辨佛國義。第四釋品。第五正入經文。

第一明經度不盡者。此五前後翻譯經文。雖復不同。今古兩本正各三卷。竊尋此經來意。不盡在於西土。文義居多。何以知之。如命十弟子問疾。各有辭對稱述不堪。著在經文近於十紙。如是命五百聲聞。又辭不任。不任之辭皆悉不度。次命四大菩薩。亦各固辭。述昔呵彈復有數紙。次命諸大菩薩。又辭不堪。不堪之言並不來度。推此往

論<sup>①</sup>。經卷不少。又文殊入室。問疾傳來旨。慇懃無量。兼八千菩薩各說不二法門。此諸言談。恐何止半卷。爰至出室詣菴羅園。對揚如來辨佛國義。當時敷演高論<sup>②</sup>往復。豈容止有數紙經文意。謂振旦生民神根狹劣。不堪具足讀誦受持彼富文。採其綱格傳流茲土。略存義焉。

(1) テキストには「論往」とあるが、『維摩經略疏』(以下、『略疏』と略記)の「推此而論」(『大正藏』卷三八、562c25、以後、卷數省略)との対応から、またテキスト注に「論往疑倒」とあるにより、「往論」と改める。

(2) テキストには「商」とあるが、『略疏』には「高論往復」(562c29)のように「高」となっている。テキストの欄外注記にはないが、意味上から「高」に改める。

【書さ下し】

維摩羅詰經文疏卷第一

釋佛國品初

次に此の經文に入るを明かす。大きく五意と爲す。第一に經の度ること盡くならざるを明かす。第二に略して文を分かす。第三に佛國義を弁ず。第四に品を釋す。第五に正しく經文に入る。

第一に經の度ること盡くならざるを明かすとは、此の五の前後の翻譯經文は、復た同じからずと雖も、今古の兩本<sup>②</sup>は正しく各三卷なり。竊かに此經の來意を尋ぬるに、西土において盡くさず。文義巨多なり。何を以て之を知る。十弟子に問疾を命ずるに、各に辭對有りて堪えざるを稱述せるが如し。著わすこと經文に在りて十紙に近し。是くの如く五百聲聞に命じて又辭して任ぜられず。不任の辭<sup>③</sup>、皆な悉く度らず。次に四大菩薩に命ずるも亦た各固辭して昔の呵彈を述ぶること復た數紙有り。次に諸大菩薩に命じ、又辭して堪えず。不堪の言、並びに來

度せず。此を推して、經卷少からざることを往論す。

又、文殊入室し、問疾して如來の旨を伝えること慇懃無量なり。兼ねて八千菩薩、各おの不二法門を説く。此の諸の言談、恐くは何ぞ半卷に止まらん。爰に室を出て菴羅園に詣し、如來に對揚して佛國義を辨ずるに至る。時に當たつて敷演して、高論往復す。豈に止だ數紙の經文の意有るを容れんや。振旦<sup>6</sup>の生民は神根狹劣にして、具足して彼の富文を讀誦し受持するに堪えずと謂えり。其の綱格を採つて茲の土に傳流せり。略存の義なり。

(1) 『維摩經』は羅什訳のほかには種々の翻訳があり、羅什訳の後には玄奘訳があるが、これは智顛在世の頃とは時代が合わない。『出三藏記集』には呉の支謙二卷、西晋竺法護訳に各一卷ずつの二本、竺叔蘭訳三卷本があり、それに羅什訳を合わせて四人異出したという。隋の費長房の『歷代三寶紀』にはさらに二訳を加えて六訳あったとする。ここにいう中国における五種は特定できない。經の訳出に関しては、高崎直道校訂『維摩詰所説經』(新国訳大藏經『維摩經』思益梵天所問經 首楞嚴三昧經』pp. 8-17、大藏出版、一九九三年)を参照<sup>5)</sup>。

(2) 今古の両本とは呉の支謙訳と羅什訳の二本を指すか。ただし、羅什訳は三卷だが、前者の支謙訳の現存本は上下二卷本である。西晋の竺叔蘭の訳は三卷だが散逸しており、詳細は不明。

(3) 經に「如是五百大弟子。各各向佛説其本緣。稱述維摩詰所言。皆曰不任詣彼問疾」(『大正藏』卷十四、542a)とあり、そのそれぞれの不任の弁を指す。

(4) 弥勒菩薩、持世菩薩、光嚴童子、文殊菩薩の四人をいう。

(5) 菴羅樹園のこと。「菴羅」は amra の音写で、マンゴーのこと。維摩經説法の会座。もと遊女のアムパパーリー比丘尼が所有していたマンゴー林。

(6) 振旦とは中国のこと。震旦、神丹なども表記。

【テキスト】 16424-123

問。此經在於西土文言浩大。將不 [464b] 即是大智度論。明佛所說不思議經有十萬偈耶。答。有師解云。即是今謂不爾。大智論所明不思議經。是華嚴之別名耳。故論云般若有二種。一 共二乘說。二 不共二乘說。不共二乘說者。如不可思議經。故華嚴云。此經不入二乘人手。共二乘說者。即是摩訶般若。諸方等及此經也。

問。華嚴之名。豈得不思議耶。此經一名不思議解脫。何故翻謂非耶。

答。此經親有兩號。一名維摩詰所說。亦名不思議解脫法門。豈獨華嚴更無異稱。然細尋大智論。前後所引不思議經。悉是華嚴經文。如說謳舍那優婆夷。爲須達那菩薩。說度衆生數量。乃是華嚴經。明善財入法界所聞事。若引此經。即云毗摩羅詰所說經。不稱不思議也。

【書き下し】

問<sup>①</sup>う、此の經、西土に在りては文言浩大なり。將に即ち是れ大智度論に佛所說の不思議經に十萬偈有りと明かすにあらずや。

答<sup>②</sup>う、有る師解して云く、即ち是れ今、爾らずと謂う。大智論明かす所の不思議經は是れ華嚴の別名なるのみと。故に論に般若に二種有りと云う<sup>③</sup>。一には共二乗の說。二には不共二乗の說なり。不共二乗の說とは不可思議經の如し。故に華嚴に云く、「此の經は二乘人の手に入らず<sup>④</sup>」と。共二乗說とは、即ち是れ摩訶般若、諸の方等、及び此の經なり。

問う、華嚴の名、豈に不思議を得んや。此の經、一に不思議解脫と名づく。何が故に翻じて非と謂うやと。答う、此の經、親しく兩號有り。一に維摩詰所說と名づけ、亦た不思議解脫法門と名づく。豈に獨り華嚴にの

み更に異稱無きや。然れば大智論を細尋するに、前後所引の不思議經は悉く是れ華嚴經の文の、漚舍那優婆夷が、須達那菩薩の爲に衆生を度することを説くこと數量と説くが如し<sup>5)</sup>。乃ち是れ華嚴經の、善財が法界に入りて聞く所の事を明かす。若し此の經を引かば、即ち毗摩羅詰所説經と云い、不思議と稱せざる也。

(1) 『大智度論』卷九十九に「又有不可思議解脱經十萬偈」(『大正藏』卷二十五、756b)とある。

(2) 有る師とは平井俊栄氏によれば、嘉祥大師吉藏のことであり、この説が引かれているのは、灌頂が吉藏疏注から援用したいことを示す証拠という(平井俊栄『法華文句の成立に関する研究』pp. 80-83)。

(3) 『大智度論』卷七十二に「有人言。般若有二種。一者唯與大菩薩説。二者三乘共説。共聲聞說中須菩提是隨佛生。但與菩薩説時不説須菩提隨佛生。」(同前卷、564a)とある。

(4) 『華嚴經』六十卷本には「一切聲聞緣覺不聞此經」(『大正藏』卷九、63a)とある。

(5) 『大智度論』に「有此大心欲度多衆生故。名摩訶薩埵。如不可思議經中。漚舍那優婆夷語須達那菩薩言。諸菩薩摩訶薩輩不爲度一人故。」(『大正藏』卷二十五、94b)とある。

#### 【テキスト】 464b13-c5

第二分經文者。即爲兩意。一明先出古今諸法師開經不同。二明一家判釋。一明諸法師不同者。此經有十四品。若什生二師及古舊諸師。悉不開科段。直帖文解釋。而肇師云。始乎淨土終法供養。其間所明雖殊不思議一也。是則寶積發問以前。用爲序説。囑累一品以爲流通。其間竝是正説也。次有靈味法師判云。此經題既云淨名所説。從方便品皆是正説。開善法師約此經文。分爲四段。一序説訖菩薩品。二正説即室內六品。三證成即菩薩行阿闍佛兩品。四流通即法供養囑累兩品。若莊嚴光宅。同用初四品爲序説。入室六品爲正説。後四品爲流通。晚三論法師

[46c] 亦同此釋。若北方地論師。用佛國一品爲序說。方便品訖見阿闍佛十一品爲正說。後兩品爲流通。但古今不同互有分別。承習之者各有宗門。是以諸禪師見此分別多延紛爭。解此經文不開科節。但約觀門直明入道意耳。

【書き下し】

第二に經文を分かつとは、即ち兩意を爲す。一には先に古今の諸法師、經を開くこと異なるを出すことを明かし、二には一家の判釋を明かす。一に諸法師異なるを明かすとは、此の經に十四品有り。什・生の二師及び古舊の諸師の若きは、悉く科段を開かず、直ちに文に帖して解釋す。而して肇師の云く、「淨土より始まり法供養に終わる其の間の明かす所、殊なると雖も不思議一なり」と。是れ則ち寶積問を發する以前を用て序說と爲し、囑累の一品、以て流通と爲す。其の間竝びに是れ正說也。

次に靈味法師有りて判じて云く、「此の經題、既に淨名所說と云う。方便品より皆是れ正說なり」と。

開善法師は此の經文に約して、分ちて四段と爲す。一に序說、菩薩品に訖る。二に正說は即ち室内の六品。三に證成は即ち菩薩行・阿闍佛の兩品。四に流通は即ち法供養・囑累の兩品なり。

莊嚴と光宅の若きは同じく初の四品を用て序說と爲し、入室の六品を正說と爲し、後の四品を流通と爲す。晩の三論法師亦た此の釋に同ず。北方地論師の若きは佛國の一品を用て序說と爲し、方便品より見阿闍佛に訖る十一品を正說と爲し、後の兩品を流通と爲す。但だ古今不同にして互いに分別有るのみ。習を承くるの者は、各宗門有り。是を以て諸禪師は此の分別多く紛爭を延くを見て、此の經文を解するに科節を開かず、但だ觀門に約して直ちに入道の意を明かすのみ。

(1) 羅什と道生(三五五―四三四)のこと。

- (2) 「帖」とは、もと、(薄いものを) 貼り付ける、の意で、一つのことと特定する、の意。ここでは経文に直接に当たってという意味。
- (3) 僧肇の『注維摩』に「此經始自于淨土。終于法供養。其中所明雖殊。然其不思議解脫一也」(『大正藏』卷三十八、327c)とある。この僧肇説の引用について、平井俊栄氏は、吉蔵の『維摩經略疏』巻第一中に同じ引用があることを指摘し、『維摩經文疏』中の引用は、灌頂が吉蔵の『略疏』から引いたものであると論じている(平井俊栄前掲書、pp. 72-75)。
- (4) 梁代、靈味寺に住した宝亮(四四一―五〇九)のこと。道明について出家し、建康の中興寺に住し、のち靈味寺に移った。涅槃・成実に通じ、勅によって『大般涅槃經義疏』を製した。この引用部分については未検。
- (5) 梁の三大法師の一人、開善寺智蔵(四五八―五二二)のこと。ここで引かれた説の所在については未検。
- (6) 莊嚴寺僧旻(四六七―五二七)と光宅寺法雲(四六七―五二九)のこと。梁の三大法師と称された三人の内二人。前注の智蔵を加えて三大法師という。二法師の經の分科説の所在については未検。
- (7) 平井俊栄氏によれば、吉蔵の『維摩經略疏』中の記述によって、この「晩の三論法師」とは興皇寺法朗のことであると知られるという(平井俊栄前掲書、pp. 61-63)。
- (8) 吉蔵の『浄名玄論』には「北土地論師」の語が見え(『大正藏』卷三十八、870c)、また日本の珍海『三論玄疏文義要』は慧均の『大乘四論玄義記』巻十に記載の、『大乘起信論』の造論者が「北土地論師」であるという有る人の説を紹介している(『大正藏』卷七十、228c)。湛然の『法華文句記』には「北人者。諸文所指。多是相州北道地論師也」(『大正藏』卷三十四、285a)とあり、ここも菩提流支の説を承けた道寵を派祖とする地論宗北道派の論師を指すか。詳細は未検。



【テキスト】 464C5-22

二明今家判釋者。若不開科段則不識經文起盡佛教承躡。若開科段執諍紛然。於解脫法橫生繫累。今正述一家尋經意趣。傍經開科而非固執。

夫如來說法雖復殊源。初中後善文必備矣。今約此三善用對序正流通。仍爲三意。一正開此經。二約觀心。三簡異衆家。

一正分此經科段者。經無大小。例有三意。一序二正說三者流通。序者大聖將說法。必現瑞表發。以爲由藉。如欲說大品經。放支節雜色之光。表欲說般若若出一切諸行。欲說法華放眉間白毫相光。表說中道實相。今此經合蓋現土。表欲說佛國。既現相由藉不同。表教門赴機有異。發起物情使感信慕。歸宗有在故爲序也。

二正說者。四衆觀瑞悉皆欣仰堪聞聖旨。大聖知時赴機說教。時衆聞經。咸沾法利故名正說也。

三流通者。流譬水之下霑。通則無滯無壅。如來大慈平等說法。非止但爲現在。亦欲遠被正像末代有緣。使沾法潤。是則法水流霑無窮。未來弟子竝沾斯澤故名流通也。

(1) テキストには「若」の次に否定辞の「不」があるが、『略疏』との対応から『大正藏』卷三十八、533b。以下巻数を略す)、またテキスト欄外注に「不疑剩」とあることから、文意上「不」を削除する。

(2) テキストには「豪」とあるが、欄外注に「豪疑毫」とあり、今、改める。

【書き下し】

二に今家の判釋を明かすとは、若し科段を開かざれば、則ち經文の起盡、佛教の躡を承くるを識らず。若し科段を開けば、諍に執して紛然とし解脫法に於いて横に繫累を生ず。今、正しく一家の經の意趣を尋ぬるを述べ、

傍ら經に科を開いて而も固執するに非ず。夫れ如來の説法は復た源殊なると雖も、初中後善の文、必ず備わるなり。今、此の三善に約して用て序正流通に對す。仍ち三意を爲す。一に正しく此の經を開く。二に觀心に約す。三に衆家を簡異す。

一に正しく此の經の科段を分かつとは、經に大小無し。例して三意有り。一に序、二に正説、三には流通なり。序とは、大聖の將に説法せんに必ず瑞を現して表に發し、以て由藉<sup>④</sup>と爲す。大品經を説かんと欲して支節<sup>⑤</sup>に雜色の光を放ち、般若が一切諸行を出すと説かんと欲するを表し、法華を説かんと欲して眉間白豪相の光を放つて、中道實相を説かんことを表すが如し。

今、此の經は蓋を合して土を現じ、佛國を説かんと欲するを表す。既に相を現ずる由藉不同にして、教門の機に赴くに異なり有るを表す。物情を發起して咸く信慕し宗に歸すこと有り在らしむるが故に、序と爲すなり。

二に正説とは、四衆、瑞を觀、悉く皆な、欣仰して聖旨を聞くに堪ゆ。大聖は時を知り、機に赴て説教す。時に衆は經を聞き、咸く法利に沾う故に正説と名づくるなり。

三に流通とは、流を水の下の淫に譬う。通ずれば則ち滯無く、壅無し。如來の大慈、平等の説法は止但だ現在の爲のみに非ず、亦た遠く正像末代の有縁に被らしめ、法をして潤い沾わしめんと欲す。是れ則ち法の水、流、霑うこと窮り無し。未來の弟子並びに斯の澤が沾うが故に流通と名づくるなり。

(1) 「躡」とは足跡のこと。「承躡」で、先例に倣う、の意。『法華文句』にも「譬不孤起承躡有由。故言譬本也」とある(『大正藏』卷三十四、836)。

(2) 仏の説法は初め善く、中に善く、後に善しという意味で、羅什訳『妙法華』序品に「爾時佛。號日月燈明如來。應供。正遍知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛世尊。演說正法。初善中善後善。其義深遠。其語

巧妙」(『大正藏』卷九、3c)とある。

(3) 仏説法の前には奇瑞が現れること。『維摩經』では、宝積と五百の長者子が仏に対して供養したそれぞれの七宝作りの宝蓋を、仏がその神力によって一つに合成し、そこに三千大千世界のすべてのものを現したことをいう。『法華經』では、天より優曇鉢華が降つたり、大地が六種に振動するなどの奇瑞が現れたことをいう。

(4) いわれ、理由、由因の意味。「由」も「籍」「藉」(同じ)も「よる」の意味。『法華文句』に「何者迹本兩門由籍各異。迹由籍起彌勒生疑。文殊爲釋。本由籍未起。」(『大正藏』卷三十四、33a)とある。

(5) 身体の節々のこと。

(6) 経で「佛之威神令諸寶蓋合成一蓋。遍覆三千大千世界。而此世界廣長之相悉於中現。」(『大正藏』卷十四、537b)とある。前注(3)を参照。

【テキスト】 464c22-465a14

今開此經文爲三分者。一始從如是我聞。訖寶積説七言偈。文具通別兩序。此於正説由藉義足名爲序分也。  
[465a] 一從寶積請問佛國因果已去。訖見阿闍佛品。有十一品半經文。皆明不思議解脱佛國因果。皆是赴機之教。現在沾益。竝爲正説也。<sup>①</sup>三從法供養品訖囑累品。明天帝發誓弘經。如來印可。勸發囑累。宣通未來。使流傳不絕。此竝屬流通也。

問曰。此經題稱維摩詰所説。今何得從佛國品爲正説耶。

答。淨名承佛威神助國。揚化化導。有功故從其受稱耳。譬如國王敕臣布政。有功而臣受賞。政令之主歸於國王。受功之名而臣取稱。不可謂臣受賞而臣爲正教。君垂政令而翻爲傍説也。淨名得佛印定。方乃爲正故。名維摩詰所説經也。

二約觀心辨序正流通者。即約三分。前二觀爲方便。即是序義。得入中道。即是正義。雙照二諦。心心寂滅自然流入薩婆若海。即流通義也。

(1) テキストには「三」の字がないが、『略疏』に「三從法供養訶累」とあり(53223)、またテキストの欄外注にも「從上疑脫三字」とあり、文意上からもこれを補う。

【書き下し】

今、此の經文を開いて三分と爲すとは、一に如是我聞より始め、寶積、七言の偈を説くに訖るまで、文、通別兩序を具す。此れ正説において由藉の義足を名づけて序分と爲すなり。二に寶積佛國の因果を請問するより已去、見阿闍佛品に訖るまで十一品半の經文有り。皆、不思議解脱佛國の因果を明かす。皆是れ機に赴くの教にして、現在益を沾す。並びに正説と爲すなり。

三に法供養品より囑累品に訖るまで、天帝の發誓弘經、如來の印可、勸發囑累は宣しく未來に通じ、流傳して絶えざらしむるを明かす。此れ並びに流通に屬すなり。

問うて曰く、此の經題は維摩詰所説と稱す。今、何ぞ佛國品より正説と爲すことを得んや。

答う、淨名は佛威神を承けて國を助け、化を揚して化導し、功有るが故に其れより稱を受くるのみ。譬えば國王の臣に敕して政を布き、功有りて、而して臣が受賞し、政令の主は國王に歸し、受功の名は臣が稱を取り、臣が受賞して臣が正教と爲り、君が政令を垂れて翻つて傍説と爲ると謂うべからざるが如きなり。淨名、佛の印定を得て方に乃ち正と爲るが故に維摩詰所説經と名づくるなり。

二に觀心に約して序正流通を辨ずとは、即ち三分に約す。前の二は觀じて方便と爲す。即ち是れ序の義なり。

中道に入るを得るは即ち是れ正の義なり。雙つながら二諦を照らす。心心寂滅にして自然に薩婆若海<sup>④</sup>に流入するは即ち流通の義なり。

- (1) 帝釈天のこと。法供養品で、天帝釈が持経者の守護を誓約することを示す。
- (2) ここでは、経の受持・読誦、如説修行を勧め、弘経を弥勒・阿難に委嘱すること。
- (3) 印可し、決定すること。師が弟子の体得した法を認可し、確定すること。
- (4) 「薩婆若」とは *śarvāra* の音写。一切智のこと。仏の深くて広大な智慧を海に喩えて薩婆若海という。

【テキスト】 465a14-168

三簡異衆家者。問。何不依什法師及諸禪師不分科段耶。答。若論行道觀行。實不繁開。今欲令學者知經文起盡。識聖人赴緣。善巧言不孤致。必有承躡。若於文句無壅。帖釋觀行轉覺分明也。

問。何不全用肇師註意。答。法供養屬於正說義。不應然也。

問。何故不依靈味。答。用佛國爲序說義。不應爾。所以然者。佛爲法王道王。三千有所宣說。豈非正也。但寶積所請。佛所酬答。赴此機緣明佛國因果。時衆聞經悟道。獲大小乘<sup>①</sup>。豈可折以爲序。又且淨名助佛闡揚。正是獎成佛教。豈可弟子助說爲正。大師所說翻爲序乎。

問。何不 [465b] 同開善分文爲四段耶。答。經無大小。例有三意。何得此經獨開四也。

問。何意不同莊嚴光宅及三論師。答。佛國爲序。其妨同前。又用菩薩行品見阿闍佛品以屬流通。恐此不然。所以者何。淨名掌擎大衆。菴羅對佛印定。室內所說始得成經。又佛還對淨名。辨佛國因果。撮經終始。宗旨分明。大衆蒙益過乎室內。此是正說。豈謂流通。

問。何不依北地大乘師。答。用佛國爲序。今家爲妨義同前也。

(1) 『略疏』には「獲大小益」とある (663c12)。

【書き下し】

三に衆家を簡異すとは、問う、何ぞ什法師及び諸禪師の科段を分けざるに依らざるや。答う、若し行道觀行を論ぜば、實に繁く開かず。今、學者をして經文の起盡を知り、聖人の縁に赴くに善巧の言は孤致ならず、必ず承躡有るを識らしめんと欲す。

若し文句に於いて壅無く、觀行を帖釋せば、轉た覺ること分明なり。

問う、何ぞ全く肇師の註の意を用いざるや。答う、法供養は正説に屬すの義はまさに然るべからざればなり。

問う、何故に靈味に依らざるや。答う、佛國を用て序説と爲す義、まさに爾るべからず。然る所以は、佛は法王道王爲り。三千の宣説する所有るは、豈に正に非ざるや。但だ寶積の請うところの佛の酬い答える所は、此の機縁に赴いて佛國の因果を明かす。時衆經を聞いて道を悟り、大小乘を獲。豈に折して以て序と爲すべけんや。又且く淨名は、佛を助け闡揚す。正は是れ佛教を獎成す。豈に弟子の助説を正と爲し、大師の所説を翻じて序と爲すべけんや。

問う、何ぞ開善が文を分けて四段と爲すに同ぜんや。答う、經に大小無きも、例せば三意有り。何ぞ此の經獨り四に開くを得ん。

問う、何の意ぞ莊嚴光宅及三論師に同ぜんや。答う、佛國を序と爲すは、其の妨げ前に同じ。又、菩薩行品・見阿闍佛品を用て以て流通に屬さしむるは恐くは此れ然らず。所以は何ん。淨名は大衆を掌撃し、菴羅にて佛に

對して印定す。室内の所説、始めて經と成ることを得。又、佛は還りて淨名に對して佛國の因果を辨ず。經の終始を撮りて宗旨分明なり。大衆益を蒙りて室内を過ぐ。此れは是れ正説なり。豈に流通と謂わん。

問う、何ぞ北地の大乘師に依らざるや。答う、佛國を用つて序と爲すは、今家坊と爲す義は前に同じきなり。

- (1) 仏道の実践修行と觀心の瞑想行のこと。
- (2) 「帖」は、(薄いものを) 貼り付ける、の意。「帖釈」で、ある事柄、事項について特別に取り上げて解釈すること。
- (3) 僧肇の『注維摩』の説。前出テキストの 464d13-c5 部分の註 (3) を参照。
- (4) 靈味寺宝亮の説。前出テキスト 464b13-c5 部分の註 (4) を参照。
- (5) 開善寺智藏の説。前出テキスト 464b13-c5 部分の註 (5) を参照。
- (6) 莊嚴寺僧旻と光宅寺法雲の説。464d13-c5 部分の註 (6) を参照。
- (7) 同義の二字による熟語。持ち上げるの意。「掌」は捧げる、捧げ持つ、の意。「擎」も同義。

citations from Jizang's works, these citations on Zhiyi's dictation part turned out to be trivial, in terms of his doctrinal thought. Therefore it can be safely said that Zhiyi's commentary is as valuable as it thought to be.

The author decided to make an annotated Japanese-translation of the *Weimojing wenshu*, which has not yet been made in Japan. The author used 『維摩經文疏』 (Sūtra Number 338, vol. 18 of *Shinsan Dainihon Zokuzōkyō* 新纂大日本統藏經 as original. It comprises 90 volumes, including 2 catalogues, which has been published from 1975 to 1980 by Kokusho Kankōkai 国書刊行会, mainly edited by Dr. Kosho Kawamura 河村孝照. And this newly edited Chinese Buddhist canon features great easy-of-use, which is succeeded from *Taishō shinshū daizōkyō*. And now one has access to Electric-text version of *Shinsan Dainihon Zokuzōkyō* via web site of CBETA (Taiwan-based Chinese Buddhist Electronic Text Association 中華電子佛典協會.)

This translation currently contains merely few paragraphs, from p. 464a7l. to p. 465b8l. of the text, but henceforth the author would like to release it constantly.

*Professor,  
International College  
for Postgraduate Buddhist Studies*



## Summary

### An annotated Japanese-translation of Zhiyi's *Weimojing wenshu* 『維摩經文疏』

FUJII Kyoko

The *Weimojing wenshu* 『維摩經文疏』 is a Zhiyi's commentary on the text of Kumārajīva's translation of the *Vimalakīrti-nirdeśa-sūtra* (*Weimojie suoshuo jing* 維摩詰所說經).

Zhiyi 智顛 (538–597) composed the commentary with twenty-five fascicles in his latest years at the request of Prince Guang of Jin. After Zhiyi died, his disciple Guanding 灌頂 (561–632), the fourth patriarch of the Tiantai school, made up the commentary to twenty-eight fascicles. This Zhiyi's commentary seemed to have been one of the most important works to research his latest doctrinal thought by the reason that Zhiyi himself dictated this. In spite of that, the commentary had not been studied so often because of its great amount. Since Zhanran 湛然 (711–782) had distilled the Zhiyi's *Weimojing wenshu*, and made the *Weimo jing lue shou* 『維摩經略疏』 with 10 fascicles, his concise commentary was generally available for study on the *Weimojie suoshuo jing* in Tiantai school. Under these circumstances, at present, Zhanran's concise commentary is included in *Taishō shinshū daizōkyō* 大正新脩大藏經, while, despite of its value, Zhiyi's original work is not.

Recently some new studies on Zhiyi's commentary have been made in overall aspects, that is, from philological study to doctrinal thoughts one. Among them, Dr. Shun'ei Hirai's study is notable in pointing that not only in the Guanding's additional part of the Zhiyi's commentary but also in the Zhiyi's own dictation part, Guanding's additions from Jizang's 吉藏 (549–623) works, were to be discovered in the existing text. Scrutinizing the